

教職課程履修者の教職に対する意識と学習への取り組みに関する研究

A survey report on the attitudes and learning of teacher training course students

酒井 朗¹, 上山 敏¹, 永田 晴子², 長谷川 秀一¹, 米山 泰夫¹, 伊藤 茂樹³, 保坂 亨⁴

¹大妻女子大学教職総合支援センター, ²大妻女子大学家政学部被服学科,

³駒澤大学総合教育研究部, ⁴千葉大学教育学部

Akira Sakai¹, Satoshi Ueyama¹, Haruko Nagata², Shuichi Hasegawa¹, Yasuo Yoneyama¹, Shigeki Ito³, and Toru Hosaka⁴

¹Teaching Profession Support Center, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

²Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

³Faculty of Arts and Sciences, Komazawa University

1-23-1 Komazawa, Setagaya-ku, Tokyo, 154-8525, Japan

⁴Faculty of Education, Chiba University

1-33 Yayoi-cho, Inage-ku, Chiba-shi, Chiba, Japan 263-8522

キーワード：学生，教職，アンケート調査

Key words : Student, Teaching profession, Survey study

抄録

本学教職総合支援センターでは、本学ならびに首都圏にある他の3つの大学で教職課程を履修する学生を対象に、教職に対する意識と学習への取り組みに関する質問紙調査を2012年秋に実施した。具体的な調査項目は、教職への動機付けの高さ、学習に対する取り組み、教員に期待される資質や能力の修得の度合いの3点についてである。回答した7割の学生は教職に就くことを志望しており、3割は高校生の頃に教職を志望するようになったと回答した。また、大半の学生は専門科目の授業も教職科目の授業も熱心に取り組んでいるが、自ら情報を得たり教育関連の本を読むことは少ない。さらに、学生たちは、同僚教員からの意見やアドバイスに耳を傾ける姿勢や担当教科の内容の修得度などについて、自身の力量を高く評価していることが分かった。

1. 研究の目的

本研究は、本学ならびに首都圏にある他の3つの大学で、教職課程を履修する学生を対象に実施した質問紙調査の結果をもとに、彼らの教職に対する意識や態度を明らかにするとともに、本学教職課程の指導上の課題を抽出することを目的としている。

平成18年7月の中教審答申では、教職に関する実践的指導力が強く求められ、履修カルテの作成と教職実践演習の履修が義務づけられた。しかし、学生の学習状況や彼らの資質・力量を把握するには、履修カルテだけではなく、教職に対する学生の意識や学習経験をできるだけ客観的に捉えることが必要である。また、学生の教職への動機付け

や資質、力量を規定する要因の解明も重要な課題である。

そこで本研究では、本学ならびに首都圏にある他の3つの大学に在籍する大学生に対して、教職に対する意識と学習への取り組みに関する質問紙調査を実施した。本報告は研究成果報告の第一報として、以下の3点について、4大学間の比較を行い、教職課程履修者の教職に対する意識や態度にみられる特徴と課題を明らかにする。

第一点は、教職への動機付けについてである。教員になりたいと強く願う学生をどれだけ養成できるかは、教職課程の重要課題である。いわゆる一般系の学部では、教職は卒業後の進路の1つでしかない。それだけに、教職課程においては、教

師としての資質や力量の涵養とともに、学生にたいして教職の魅力伝え、教職に対する志望をより一層高めていくことが必要となる。このためには、どのくらいの学生が、またどのような学生が卒業後の進路として教職を志望しているのかを明らかにする必要がある。

第二点は、学生の学習に対する取り組みについてである。質問紙では、教職科目ならびに専門科目に関する取り組みとともに、学生自身の自主的な学びについても尋ねた。その1つは、新聞のニュースや、教育や子ども・生徒に関する本を読む機会をどの程度持っているかについてである。また、自分で自主的に教職について勉強しているかどうか、友だちと教職について話すかどうかについても尋ねた。

第三点は、教員に期待される資質や能力が結果としてどの程度身に付いているかについてである。自記式質問紙という方法上の制約から、資質や能力がどの程度身に付いていると自己評価するのかを分析する。

教職実践演習のために各学生が作成する履修カルテでも、学生の自己評価が記入されることになっている。今回の調査は、学生自身による履修カルテの自己評価がどのようなものを理解する手がかりにもなる。

2. 調査対象と方法

調査対象は、本学ならびに首都圏にある他の3つの大学で、主に中学校・高等学校の各教科や、養護教諭、栄養教諭の教職課程を履修する学生である。調査の実施にあたっては、各大学の教職課程担当者に連絡を取り、自記式での質問紙調査の実施を依頼した。

対象校は次の通りである。A大学は教育学部を持つ国立大学であり、附属学校園も設置されている。なお、今回のアンケートには教職科目を履修する他学部の学生も含まれている。B大学は非教員養成系の私立大学であり、入試偏差値は学科によって異なるものの、代々木ゼミナールの資料では50~57程度である。教職課程の担当部署があり、教職専任教員が複数名配置されている。C大学は国立の非教員養成系の大学で、教職課程の担当部署はないが、附属学校園を有している。なお、X大学は本学を指す。

調査時期は2012年10月~11月で、各大学の教職科目担当者に学生への質問紙の配布を依頼し、

各学生に自記式で回答してもらった。有効回答数は782件で、大学別学年別の内訳は表1に示したとおりである。なお、A大学では小学校課程の学生44名が含まれており、C大学も併せ、小学校免許を取得する学生は合計70名が含まれている。このほかに幼稚園教諭、特別支援学校、養護教諭なども10~20名程度含まれている。表2は、各免許課程の校種別の人数の一覧である。

表1. 大学別・学年別の有効回答数

	X大	A大	B大	C大	合計
1年	117	48	0	97	262
2年	116	81	100	20	317
3年	80	19	67	4	170
4年	0	9	0	3	12
N.A.	7	8	4	2	21
合計	320	165	171	126	782

(人)

表2. 履修している教職免許の校種別の人数

免許校種	回答数(人)
幼稚園	16
小学校	70
特別支援学校	11
養護	25
栄養	65
中学校	563
高等学校	673

※複数の免許課程を履修している場合があり、合計人数は表1の有効回答数と一致しない。

3. 分析結果

3.1. 教職志望の度合い

教職課程を履修する学生のうち、卒業後に教職に就くことを希望する学生はどの程度いるのだろうか。表3は「あなたは大学卒業後に教職にどのくらい就きたいと思いますか」という質問に対して、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの4件法で回答してもらった結果である。「とてもそう思う」と回答した学生は全体の30.1%を占めた。これに「少しそう思う」と回答した者の割合を加えると、全体の68.0%は教職に就くことを一定程度望んでいることが分かる。しかしその

一方で、教職を履修しているものの教職に就きたいとは「あまり」「全く」思っていない学生も30%近くに及んでいた。

大学別に結果を比較してみると、「とてもそう思う」と答えた者の割合が最も高かったのはA大学で、回答した学生の43.6%がそのように答えた。また、非教員養成系のB大学の学生も志望度が高く、「とてもそう思う」と回答した割合は40.4%に達した。一方、C大学ではその割合は低く、15.9%にとどまった。X大学はその間にあり、23.1%の学生が「とてもそう思う」と回答した。

表3. 卒業後の教職志望

	X大	A大	B大	C大	全体
とても そう思う	23.1%	43.6%	40.4%	15.9%	30.1%
少し そう思う	42.5%	36.4%	33.9%	33.3%	37.9%
あまりそう 思わない	24.4%	14.5%	18.7%	44.4%	24.3%
まったくそう 思わない	5.9%	4.2%	5.3%	5.6%	5.4%
N.A.	4.1%	1.2%	1.8%	0.8%	2.4%
合計 (実数)	100.0% (320)	100.0% (165)	100.0% (171)	100.0% (126)	100.0% (782)

カイ二乗値 69.533 p<.001

表4は、大学ごとの学年別の教職志望の結果である。教員養成系学部を持つA大学は、教職に就きたいと「とても」「少し」思っていると回答した者が、全学年で70%以上を占めた。また、「とてもそう思う」と答えた学生は学年が上がるほど高くなっており、学生の動機付けが高まっている様子がうかがえる。

B大学も「とても」「少し」思っていると回答する者が全学年で70%以上を占めており、「とてもそう思う」と回答する学生も学年を問わず約4割を占めていた。反対にC大学は「とてもそう思う」と回答した学生は学年を問わず少なかった。

X大学は、1年生で「とてもそう思う」と回答した学生がかなり多かったが、学年が上がるとともに志望する者の割合の減少傾向が見られた。

これらの違いは、学年毎の集団特性の違いということも考えられ、一概に学年進行により意識が変化するとみなすことは難しい。また、学年進行

とともに教職課程放棄者が相当数に上る場合は、教職を強く志望する者だけが上級学年まで履修を継続するという考えられる。X大学で1年生よりも2年生3年生の方が志望度が低いのは、それぞれの学年の特徴ということもありうるし、同大学では教職に就く意思があまり強くない者も、上級学年まで履修を継続させる傾向が強いのかもしれない。

表4. 大学ごとの学年別の教職志望

	X大	A大	B大	C大
1年	34.2% (77.8%)	29.2% (75.0%)		15.5% (47.5%)
2年	14.7% (58.7%)	43.2% (81.5%)	39.0% (72.0%)	15.0% (60.0%)
3年	18.8% (55.0%)	52.6% (78.9%)	41.8% (77.6%)	

※上段の数字は「とてもそう思う」のみの割合

下段の()内の数字は「とても」+「少し」そう思うの割合

※大学別ではサンプル数が少ない学年は掲載していない

3.2. 教職を目指した時期

教職課程を履修している学生は、いつごろから教職を志望するようになったのだろうか。

全体としては、「高校生の頃」に教職を志望するようになったと回答した者が最も多く、31.3%を占めた(表5)。また、全体の24.8%は「大学生になってから」と回答しており、入学後のガイダンスの重要性が浮かび上がった。

なお、教職志望度の高い学生の多いA大学では、学生の7割以上は、大学入学前に教職を志望している。また、B大学でもその割合が6割を超えている。X大学でも56.2%が大学入学前までに教職を志望したと回答しており、以上の3つの大学では入学前からの志望者が半数以上を占めている。

これに対してC大学では、「なろうと思ったことはない」と回答した者が35.7%を占めており、教職課程を履修しながらも教職を志望しない学生が3分の1を占めていることが分かる。入学前から教職を志望していたと答えた学生も35.7%にとどまっており、その他の大学よりかなり低い割合となっている。

表 5. 教職を目指した時期

	X大	A大	B大	C大	全体
小学生より前	0.3%	1.8%	0.0%	1.6%	0.8%
小学生の頃	8.8%	12.1%	9.4%	9.5%	9.7%
中学生の頃	16.2%	18.2%	19.9%	7.9%	16.1%
高校生の頃	30.9%	39.4%	35.1%	16.7%	31.3%
大学生になってから	27.8%	17.0%	24.0%	28.6%	24.8%
なろうと思ったことはない	15.9%	11.5%	11.1%	35.7%	17.1%
N.A.	0.0%	0.0%	0.6%	0.0%	0.1%
合計(実数)	100.0% (320)	100.0% (165)	100.0% (171)	100.0% (126)	100.0% (782)

カイ二乗値 68.911 p<.001

3.3. 教職を目指すようになった理由

学生が教職を目指すようになった理由は様々なことが考えられる。アンケートでは、教職になろうと思ったことはないという回答した者を除く全員に対し、教職を志望した理由を10項目について尋ねたが、「とてもあてはまる」と答えた者の割合の高さで項目を分けて順にみていくと、次のような傾向がうかがえる。

まず、30%を超えたのは、「自分が履修している免許の教科が好きだった」、「理想となる先生にめぐりあえた」、「人とかかわる仕事に就きたいと思った」、「子ども・生徒が好き」の4項目であった(表6~表9)。このうち、大学間で有意差がみられたのは「自分が履修している免許の教科が好きだった」のみであり、それ以外の3項目は一律にどの大学の学生も教職を志望する理由に挙げている割合が高い。「自分が履修している免許の教科が好きだった」は、大学間の違いが比較的大きかった項目であり、B大学では「とてもあてはまる」と答えた学生が49.3%と高い割合を占めていた。ただし、「とてもあてはまる」「少しあてはまる」の2つの選択肢のいずれかに○をつけた者の割合は、いずれの大学においても60%を超えており、全体としてきわめて高い割合であることが分かる。

表 6. <教師を志望した理由>

自分が履修している免許の教科が好きだった

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	32.0%	31.5%	49.3%	35.8%	36.4%
少しあてはまる	42.8%	29.5%	27.6%	38.3%	35.6%
あまりあてはまらない	16.0%	19.9%	11.8%	13.6%	15.6%
まったくあてはまらない	5.2%	10.3%	2.0%	7.4%	5.9%
N.A.	4.1%	8.9%	9.2%	4.9%	6.5%
合計(実数)	100.0% (269)	100.0% (146)	100.0% (152)	100.0% (81)	100.0% (648)

カイ二乗値 36.035 p<.001

表 7. <教師を志望した理由>

理想となる先生にめぐりあえた

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	32.3%	31.5%	42.8%	34.6%	34.9%
少しあてはまる	38.3%	37.7%	31.6%	34.6%	36.1%
あまりあてはまらない	17.8%	16.4%	12.5%	19.8%	16.5%
まったくあてはまらない	6.7%	5.5%	3.9%	6.2%	5.7%
N.A.	4.8%	8.9%	9.2%	4.9%	6.8%
合計(実数)	100.0% (269)	100.0% (146)	100.0% (152)	100.0% (81)	100.0% (648)

カイ二乗値 12.864 p=.379

表 8. <教師を志望した理由>
人とかかわる仕事に就きたいと思った

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	30.9%	35.6%	30.9%	37.0%	32.7%
少しあてはまる	41.6%	32.2%	37.5%	34.6%	37.7%
あまりあてはまらない	19.7%	19.9%	17.1%	21.0%	19.3%
まったくあてはまらない	3.7%	3.4%	5.3%	2.5%	3.9%
N.A.	4.1%	8.9%	9.2%	4.9%	6.5%
合計(実数)	100.0% (269)	100.0% (146)	100.0% (152)	100.0% (81)	100.0% (648)

カイ二乗値 11.322 p=.502

表 9. <教師を志望した理由> 子ども・生徒が好き

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	27.1%	37.7%	28.9%	28.4%	30.1%
少しあてはまる	41.6%	38.4%	39.5%	46.9%	41.0%
あまりあてはまらない	21.6%	11.6%	19.1%	17.3%	18.2%
まったくあてはまらない	4.8%	3.4%	2.6%	2.5%	3.7%
N.A.	4.8%	8.9%	9.9%	4.9%	6.9%
合計(実数)	100.0% (269)	100.0% (146)	100.0% (152)	100.0% (81)	100.0% (648)

カイ二乗値 16.616 p=.165

次に、「とてもあてはまる」と答えた者の割合が全体の20%台を占めたのは、「仕事として安定していると思った」、「自分が履修している免許の教科が得意だった」の2項目である(表10, 表11). なお、これらの項目では大学間の差異が非常に大きい。

「仕事として安定していると思った」という項目は大学間の差異が最も顕著であった。「とてもあてはまる」と回答した者の割合が最も高かったのはX大学で、29.4%がそう答えた。これに対してB大学で同様に回答したのは10.5%であった。B大学では、「あまり」または「まったく」あてはまらないと回答した学生が合計で51.9%を占め

ており、X大学とは対照的である。A大学、C大学はどちらかと言えばX大学に近い。

反対に、「自分が履修している免許の教科が得意だった」という項目で「とてもあてはまる」と答えた学生が最も多かったのは、B大学であり38.8%を占めた。X大学でそのように回答した学生は18.2%であり、B大学を大きく下回る。B大学とX大学では入試偏差値がそれほど異ならないにもかかわらず、このような差異がみられる理由については、今後の課題として究明する必要があるだろう。

表 10. <教師を志望した理由>
仕事として安定していると思った

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	29.4%	21.2%	10.5%	22.2%	22.2%
少しあてはまる	46.8%	38.4%	28.3%	44.4%	40.3%
あまりあてはまらない	14.9%	19.9%	35.5%	17.3%	21.1%
まったくあてはまらない	4.8%	11.6%	16.4%	11.1%	9.9%
N.A.	4.1%	8.9%	9.2%	4.9%	6.5%
合計(実数)	100.0% (269)	100.0% (146)	100.0% (152)	100.0% (81)	100.0% (648)

カイ二乗値 64.851 p<.001

表 11. <教師を志望した理由>
自分が履修している免許の教科が得意だった

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	18.2%	22.6%	38.8%	25.9%	25.0%
少しあてはまる	42.0%	34.2%	33.6%	40.7%	38.1%
あまりあてはまらない	29.4%	21.9%	15.8%	21.0%	23.5%
まったくあてはまらない	5.9%	12.3%	2.6%	7.4%	6.8%
N.A.	4.5%	8.9%	9.2%	4.9%	6.6%
合計(実数)	100.0% (269)	100.0% (146)	100.0% (152)	100.0% (81)	100.0% (648)

カイ二乗値 43.428 p<.001

一方、「親や親戚に学校の教員がいる」、「自

分が受けた教育とは違う教育をしたい」の2項目は、いずれの大学でも「とてもあてはまる」と回答した学生が全体の1割程度であった(表12, 表13)。ただし、「少しあてはまる」と併せれば、いずれの項目も全体の4分の1を占めており、これらの項目も無視できない。

親や親戚に学校の教員がいることが志望理由の1つとなっている学生には、明確なロールモデルがいることを意味している。こうした学生には、ロールモデルへの聞き取り等を通じて、より一層動機付けを高めることができるかもしれない。

また、反対に「自分が受けた教育とは違う教育をしたい」という学生には、過去の教育経験を振り返りそれを反面教師としてどのような教師になりたいかを考えさせる指導をしていくことが効果的であろう。

表12. <教師を志望した理由>

親や親戚に学校の教員がいる

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	14.5%	13.0%	9.2%	13.6%	12.8%
少しあてはまる	14.1%	10.3%	9.9%	19.8%	13.0%
あまりあてはまらない	19.7%	11.6%	9.9%	14.8%	15.0%
まったくあてはまらない	47.2%	54.8%	61.8%	46.9%	52.3%
N.A.	4.5%	10.3%	9.2%	4.9%	6.9%
合計(実数)	100.0% (269)	100.0% (146)	100.0% (152)	100.0% (81)	100.0% (648)

カイ二乗値 25.938 p<.05

表13. <教師を志望した理由>

自分が受けた教育とは違う教育をしたい

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	6.7%	8.2%	9.2%	4.9%	7.4%
少しあてはまる	20.1%	21.2%	19.1%	22.2%	20.4%
あまりあてはまらない	46.8%	42.5%	39.5%	44.4%	43.8%
まったくあてはまらない	21.9%	17.1%	22.4%	23.5%	21.1%
N.A.	4.5%	11.0%	9.9%	4.9%	7.3%
合計(実数)	100.0% (269)	100.0% (146)	100.0% (152)	100.0% (81)	100.0% (648)

カイ二乗値 12.455 p=.410

また、「いじめや問題を抱えた生徒を支えたい」、「給与がよいと思った」の2項目についても、全体では、とてもあてはまると回答した者は10%程度にすぎなかった(表14, 表15)。ただし、これらの項目では大学間の違いが比較的大きかった。

「いじめや問題を抱えた生徒を支えたい」について「とてもあてはまる」と答えた学生が多かったのはA大学であり、21.9%がそのように回答した。これは、教育問題を学ぶ機会の多い教育学部の学生が大半を占めるA大学ゆえの特徴だと言えよう。これに対してC大学では、そのように回答した学生は3.7%とごくわずかであった。

教師を志望した理由として、「給与がよいと思った」という回答が突出して高かったのはX大学であり、14.5%が「とてもあてはまる」と答えた。なお、「仕事として安定していると思った」という質問でもX大学では同じように回答した学生が多かった。教職は専門職であり、公立学校の教員になれば身分も安定している。X大学では、こうした職業としての魅力にも強く惹かれる学生が多いことが分かる。

表 14. <教師を志望した理由>

いじめや問題を抱えた生徒を支えたい

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	13.0%	21.9%	17.1%	3.7%	14.8%
少しあてはまる	33.5%	31.5%	27.6%	43.2%	32.9%
あまりあてはまらない	35.7%	26.0%	39.5%	37.0%	34.6%
まったくあてはまらない	13.8%	8.9%	6.6%	9.9%	10.5%
N.A.	4.1%	11.6%	9.2%	6.2%	7.3%
合計(実数)	100.0% (269)	100.0% (146)	100.0% (152)	100.0% (81)	100.0% (648)

カイ二乗値 35.098 p<.001

表 15. <教師を志望した理由> 給与がよいと思った

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	14.5%	5.5%	4.6%	6.2%	9.1%
少しあてはまる	39.8%	23.3%	12.5%	22.2%	27.5%
あまりあてはまらない	34.9%	44.5%	50.0%	45.7%	42.0%
まったくあてはまらない	6.3%	17.8%	23.7%	21.0%	14.8%
N.A.	4.5%	8.9%	9.2%	4.9%	6.6%
合計(実数)	100.0% (269)	100.0% (146)	100.0% (152)	100.0% (81)	100.0% (648)

カイ二乗値 78.872 p<.001

3.4. 学生の学習に対する取り組みについて

3.4.1. 授業に対する取り組み

次に、学生の学習への取り組み状況をみていきたい。最初は授業への取り組みについてである。教職科目と専門科目の学習に関する取り組みを自己評価してもらったところ、全体としては大半の学生が、どちらの科目も熱心に受けていることが分かった。「とてもあてはまる」または「すこしあてはまる」を合計すると、教職科目については78.0%の学生がそのいずれかに回答し、専門科目については86.8%の学生がそう回答した(表16, 表17)。

「とてもあてはまる」と回答した割合に注目し

ても、専門科目についてはどの大学の学生もかなり熱心に受けていた。しかし、教職科目の授業に対する取り組みは、大学間でかなりばらつきが見られた。「とてもあてはまる」と回答した学生が多かったのは、X大学(33.1%)とB大学(31.6%)であった。C大学でこれに該当する学生は10.3%であり、「あまり」または「まったく」あてはまらなると回答した学生が34.9%に達した。

なお、以上の結果を教職志望の度合いと照らし合わせてみれば、X大学は教職志望の度合いはそれほど強くないものの、教職の授業は熱心に受けている学生が多いと言えるだろう。

表 16. <学生の学習に対する取り組み>

教職科目の授業を熱心に受けている

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	33.1%	20.6%	31.6%	10.3%	26.5%
少しあてはまる	47.5%	57.0%	51.5%	54.8%	51.5%
あまりあてはまらない	16.9%	18.8%	15.2%	31.7%	19.3%
まったくあてはまらない	1.9%	2.4%	1.2%	3.2%	2.0%
N.A.	0.6%	1.2%	0.6%	0.0%	0.6%
合計(実数)	100.0% (320)	100.0% (165)	100.0% (171)	100.0% (126)	100.0% (782)

カイ二乗値 39.653 p<.001

表 17. <学生の学習に対する取り組み>

専門科目の授業を熱心に受けている

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	37.5%	30.3%	44.4%	40.5%	38.0%
少しあてはまる	50.6%	53.9%	39.2%	50.8%	48.8%
あまりあてはまらない	11.6%	12.1%	12.9%	7.9%	11.4%
まったくあてはまらない	0.0%	1.8%	2.3%	0.8%	1.0%
N.A.	0.3%	1.8%	1.2%	0.0%	0.8%
合計(実数)	100.0% (320)	100.0% (165)	100.0% (171)	100.0% (126)	100.0% (782)

カイ二乗値 22.672 p<.05

3.4.2. 学生の自主的な取り組み

大学教育では、授業以外にも、関心のある問題について自主的に勉学に励むことが、学生に強く期待されている。そこで各学生に対して、以下のような取り組みを行っているかどうか尋ねた。

1 つは、新聞のニュースや、教育や子ども・生徒に関する本を読む機会をどの程度持っているかについてである。また、自分で自主的に教職について勉強しているかどうか、友だちと教職について話すかどうかについても尋ねた(表 18~表 21)。

新聞のニュースを読むかとの質問について、「とてもあてはまる」と回答した者は全体の 8.2% だった。「少しあてはまる」を加えても 34.8% にすぎなかった。また、教育や子ども・生徒に関する本を読むかとの質問について、「とても」または「少し」あてはまるとの回答を合計しても 28.8% にすぎなかった。

全体としては、教職課程を履修する今の学生は、自ら情報を得たり、教育関連の本を読むことは少ないと言える。履修免許の教科に関して自主的に勉強するかどうかという質問でも肯定的な回答は少なく、「とても」または「少し」あてはまるを合計しても 36.3% にすぎなかった。

なお、新聞を読むかどうかについては、B 大学で「とてもあてはまる」と答えた学生が 15.8% に達し、相対的に高かった。自主的に勉強するかどうかという質問でも、B 大学の学生には「とてもあてはまる」と回答した学生が多く 13.5% を占めた。B 大学では、一部の学生が大変熱心に、教職に関して勉強に取り組もうとする姿勢があることがうかがえた。

教職のことについて友だちと話をするかどうかという質問には、いずれの大学でも肯定的な回答が多く 73.0% を占めた。反対に、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」と回答した学生も全体の 4 分の 1 に達した。非教員養成系の大学・学科の場合、教職課程を履修するかどうかは本人の選択になるため、これらの学生は周囲の友だちとは別に個人的な判断で教職課程を履修している可能性が高いと思われる。こうした学生に対して相談の機会を増やすことも大学の支援として今後求められるだろう。

表 18. <学生の学習に対する取り組み>
新聞のニュースを読む

	X 大	A 大	B 大	C 大	全体
とてもあてはまる	4.1%	7.3%	15.8%	9.5%	8.2%
少しあてはまる	28.8%	24.8%	27.5%	22.2%	26.6%
あまりあてはまらない	47.5%	37.6%	36.3%	46.8%	42.8%
まったくあてはまらない	18.8%	29.7%	19.9%	21.4%	21.7%
N.A.	0.9%	0.6%	0.6%	0.0%	0.6%
合計(実数)	100.0% (320)	100.0% (165)	100.0% (171)	100.0% (126)	100.0% (782)

カイ二乗値 33.422 p<.001

表 19. <学生の学習に対する取り組み>
教育や子ども・生徒に関する本を読む

	X 大	A 大	B 大	C 大	全体
とてもあてはまる	3.4%	4.2%	8.2%	2.4%	4.5%
少しあてはまる	22.2%	30.3%	24.6%	21.4%	24.3%
あまりあてはまらない	47.8%	41.8%	45.0%	50.0%	46.3%
まったくあてはまらない	26.2%	23.0%	20.5%	25.4%	24.2%
N.A.	0.3%	0.6%	1.8%	0.8%	0.8%
合計(実数)	100.0% (320)	100.0% (165)	100.0% (171)	100.0% (126)	100.0% (782)

カイ二乗値 16.864 p=.155

表 20. <学生の学習に対する取り組み>
履修免許の教科に関して自主的に勉強する

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	6.2%	9.1%	13.5%	1.6%	7.7%
少しあてはまる	27.2%	30.3%	29.2%	29.4%	28.6%
あまりあてはまらない	54.1%	49.7%	38.0%	54.0%	49.6%
まったくあてはまらない	12.2%	10.3%	18.7%	15.1%	13.7%
N.A.	0.3%	0.6%	0.6%	0.0%	0.4%
合計 (実数)	100.0% (320)	100.0% (165)	100.0% (171)	100.0% (126)	100.0% (782)

カイ二乗値 27.796 $p < .01$

表 21. <学生の学習に対する取り組み>
教職のことについて友だちと話をする

	X大	A大	B大	C大	全体
とてもあてはまる	21.2%	30.9%	29.2%	19.0%	24.7%
少しあてはまる	55.0%	43.6%	42.1%	46.0%	48.3%
あまりあてはまらない	17.5%	20.6%	20.5%	29.4%	20.7%
まったくあてはまらない	5.6%	4.2%	7.6%	5.6%	5.8%
N.A.	0.6%	0.6%	0.6%	0.0%	0.5%
合計 (実数)	100.0% (320)	100.0% (165)	100.0% (171)	100.0% (126)	100.0% (782)

カイ二乗値 20.999 $p = .050$

3.4.3. 教員に期待される資質や能力の修得に関する自己評価

教職課程を履修する学生は勉学や様々な経験を通じて、教員に期待される資質や能力をどの程度修得しているだろうか。この点については客観的な評価方法が確立していないため、ここでは教員に期待される12の項目について、学生に各項目の修得度を4段階で自己評価させた。その結果、「とてもあてはまる」と回答した学生はいずれの項目でも少なく、「少しあてはまる」または「あまりあてはまらない」のいずれかに回答が集中していた。このためこの質問では回答を集約し、「とてもあて

はまる」「少し当てはまる」と回答した学生の割合だけを大学毎に示すこととした。

表22がその結果である。12の質問項目を、「とても」または「少し」あてはまると回答した者の割合が高い順に並べている。

また、大学別にクロス集計した結果をカイ二乗検定にかけた場合に、危険率5%水準で有意差があった項目には右端に「*」を1つ、1%水準で有意差がみられた項目には「*」を2つ付けている。

これらの結果から、次のようなことが分かった。

まず、半数以上の学生が「とても」または「少し」あてあまると回答した項目は、多いものから順に「同僚の教員からの意見やアドバイスに耳を傾ける姿勢」、「担当する教科の内容」、「教員としての使命感」、「中学校や高校生の心理や発達的な特徴」となった。

このうち最も割合が高かったのは、「同僚の教員からの意見やアドバイスに耳を傾ける姿勢」で、全体で78.0%の学生が「とても」または「少し」あてはまると回答した。コミュニケーション力が期待される中で、この項目について肯定的な回答が多かったのは、それまでの学校経験や学外での様々な経験を通じて人の意見を聞くということに一定程度の自信をもっているからだと思われる。また、「教員としての使命感」については内容が抽象的で何をもって使命感を修得したと答えるべきかが曖昧なため、教職に就くことに対して意識の高い学生は高く評価したものと思われる。

「担当する教科の内容」について、「とても」または「少し」あてはまるという回答が多かったのは、志望理由として「自分が履修している免許の教科が好きだった」と答えた学生が多かったこととの関連が考えられる。今回の調査は中学・高校の教職課程の学生が大半を占めているが、それらの学生の多くは免許教科の内容について自信を持っていることがうかがえる。また、「中学校や高校生の心理や発達的な特徴」について肯定的な回答が多かったのは、教職科目の関連する講義などを通じて、そうした課題について、一定程度学習しているからかもしれない。

なお、これら4項目については、いずれの項目でもB大学の数値が高かった。とくに「教員としての使命感」、「中学校や高校生の心理や発達的な特徴」の2項目は有意差が示されており、他大学との間ではっきりした差異がみられる。

また、X大学の学生は、「同僚の教員からの意見

やアドバイスに耳を傾ける姿勢」, 「教員としての使命感」, 「中学生や高校生の心理や発達的な特徴」の3項目では他大学の学生とそれほど大きな差異はみられないが, 「担当する教科の内容」については回答に大きな隔たりが見られた。同大学では, 教科面の重点的指導が必要なことが今後の課題として指摘できる。

修得していると回答した割合が低かった項目は, いずれも実践的な指導力に相当する項目である。表の中で, 「とても」または「少し」あてはまると回答した学生が3割程度ないし, それ以下の項目を並べてみると, 次の5項目「公立学校教員の服務の内容」, 「生徒間のいじめや問題行動に対応する力」, 「担当する教科の授業力」, 「学級をまとめていく力」, 「改訂された中学校や高校の学習指導要領」であった。

「生徒間のいじめや問題行動に対応する力」, 「担当する教科の授業力」, 「学級をまとめていく力」は生徒指導力, 授業力, 学級経営力であり, いずれもいわゆる実践的な指導力に相当する。また, 服務は公立学校教員としての必須修得事項であるが, この項目についても「とても」または「少し」あてはまるという回答は全体の3割程度にとどまっている。さらに, 全体で最も低かったのは「改訂された中学校や高校の学習指導要領」であった。新しい学習指導要領の実施に向けて, 修得が強く期待されるものだが, 学生の自己評価はかなり低い。

学生の自己評価がこれらの項目で低かったのは, 経験の浅い学生にとって, 具体的にどのような指導が求められているかがはっきり分かれば分かるほど, そのような力量がないことを痛感するからではないだろうか。これと同様に, 服務の内容も法律で細かく規定されており, それだけに学生は自分にそのような資質が備わっていないことを理解するのではないか。

このように考えると, 履修カルテにおいて学生に自己評価させる場合, 評価項目をできるだけ明確にして, どのような力量が求められているかをイメージしやすくすることが必要だろう。今回の結果は, 今後の履修カルテの在り方を考える上でも大変参考になる。

なお, X大学については, 「改訂された中学校や高校の学習指導要領」に関する修得の度合いが他大学より低いことが明らかとなった。「とても」または「少し」あてはまると回答した学生は19.7%

であり, B大学の38.6%と比べると約半分であった。

表22. 教員に期待される資質や能力の修得に関する自己評価

	X大	A大	B大	C大	全体	
同僚の教員からの意見やアドバイスに耳を傾ける姿勢	76.3%	83.0%	83.1%	69.0%	78.0%	*
担当する教科の内容	55.7%	67.9%	68.4%	65.9%	62.7%	
教員としての使命感	54.7%	65.4%	62.6%	47.6%	57.5%	**
中学生や高校生の心理や発達的な特徴	52.2%	47.8%	62.0%	41.3%	51.7%	*
教員の役割や職務内容の理解	46.6%	39.4%	50.3%	58.7%	47.8%	
生徒や保護者とコミュニケーションする力	42.8%	46.1%	52.0%	33.3%	43.9%	
教育課題を把握し対応する力	35.9%	44.9%	42.7%	42.9%	40.4%	
公立学校教員の服務の内容	31.0%	32.7%	32.2%	41.3%	33.3%	
生徒間のいじめや問題行動に対応する力	31.3%	29.7%	31.6%	25.4%	30.1%	
担当する教科の授業力	23.5%	32.2%	31.6%	30.1%	28.1%	
学級をまとめていく力	23.8%	26.6%	31.6%	25.4%	26.4%	
改訂された中学校や高校の学習指導要領	19.7%	23.0%	38.6%	27.0%	25.7%	**

*: $p < .05$, **: $p < .01$

※各セルの数値は「とてもあてはまる」, 「少しあてはまる」を合計した割合(%)

4. 終わりに

本稿では, 本学ならびに首都圏にある3つの大学で, 教職課程を履修する学生に対して実施した質問紙調査をもとに, 教職への動機付けの高さ, 学習に対する取り組み, 教員に期待される資質や能力の修得の度合い, の3点について全体的な傾向の把握と大学間の比較を行った。調査対象となったのは, 主に中学, 高校の各教科の免許課程を

履修している学生である。

調査から、今回対象となった学生には、教職に対する意識や態度に関して以下のような特徴があることが浮かび上がった。

①教職課程には、教職に就きたいと考えている学生がほぼ7割、あまりそれを強く望んでいない学生が3割の割合を占めている。なお、教職に就くことを強く志望している学生は全体の3割程度である。

②全体では、「高校生の頃」に教職を志望するようになったと回答している者が最も多く、3割を占めている。なお、全体の4分の1の学生は大学生になってから教職を志望するようになったと回答しており、大学側のガイダンスの重要性が浮かび上がった。

③教職課程を履修している学生の大半は、専門科目の授業も教職科目の授業も熱心に取り組んでいる。ただし、自ら情報を得たり、教育関連の本を読むことは少ない。履修免許の教科に関して自主的に勉強する学生も全体で4割を下回る程度である。

④教員に期待される資質や能力の修得度について学生自身に自己評価させてみたところ、同僚の教員からの意見やアドバイスに耳を傾ける姿勢や担当する教科の内容などを高く評価していることが分かった。反対に生徒指導力、授業力、学級経営力やサービスに関する修得度については自己評価が低かった。

なお、X大学の指導上の課題としては、下記の諸点が指摘できる。

①上級学年の教員志望度が低くなっている。学年集団による違いかもしれないが、学年が上がるにつれて教師への志望度が上がるような体系的指導が求められる。X大学でも入学以前から教職を志望していた学生が過半数を占めており、その気持ちをより高めていくような指導が必要である。

②教職への志望理由として、担当教科が得意であったという学生は相対的に割合が低かった。その

一方で、教職の職業としての安定性や経済的な面での魅力も感じていることが分かった。担当教科の学力補充の必要性があるとともに、ガイダンスを通じてより多くの学生に教職の様々な魅力をアナウンスしていくことが課題である。

③学習への取り組みは他大学の学生と比較しても大変熱心である。ただし、自主的な学習活動は全般的に他大学と同様に低調であり、その点での活性化が図られる必要性がある。

④教員に期待される資質や能力の修得度において、改訂された学習指導要領の内容に関する修得度が低いという結果が見られた。これについても各講義の中で指導を充実させていく必要がある。

今後は以上の結果をもとにして、学生への指導やガイダンスをより一層充実していく必要がある。また、取得しようとする免許の種類によっても教職課程への意識や態度に違いが見られることも予想され、今後は今回収集したデータについて、より分析を深めていきたい。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(K070)の助成を受けたものである。

参考文献

- [1]酒井 朗「現代日本における教師の教職観の構造—教師としてのやりがい意識を中心に—」『教職の専門性と教師文化に関する研究』(平成6・7年度文部省科学研究費 総合研究(A)「教師の専門性と教師文化に関する国際比較共同研究」研究成果報告書, 研究代表者: 藤田英典.) 1997, p.57-70.
- [2]酒井 朗「教職大学院と教職の『高度な専門性』」『学校運営』 50(4), 2008, p.12-15
- [3]耳塚寛明, 油布佐和子, 酒井 朗「教師への社会的アプローチ—研究動向と課題—」, 『教育社会学研究』第43集, 1988, p.84-120.

Abstract

The Teaching Profession Support Center of Otsuma Women's University conducted a survey on the attitudes and learning of students who took teacher training courses at four universities in Tokyo metropolitan area in the fall of 2012. It asked them motivation towards teaching professions, learning attitudes and their self-evaluation on teaching competence. About 70% of respondents wanted to be teachers and 30% answered they became thinking to be teachers in their high school days. Although most students studied hard their major subjects as well as teacher training course curriculum, they did not get relevant information actively, nor do they read books on education independently. They highly evaluated their own attitude of accepting advice from colleagues and learning of their specialties.

(受付日：2013年8月5日，受理日：2013年8月19日)



酒井 朗 (さかい あきら)

現職：大妻女子大学教職総合支援センター所長・教授

東京大学大学院教育学研究科博士課程単取取得退学

専門は教育社会学。現在は社会から排除される可能性の高い児童生徒の支援について研究を進めており、とくに高校中退や不登校問題について焦点を当てた研究を行っている。また、併行してこれからの教員養成の在り方についても検討を進めている。

主な著書：

進学支援の教育臨床社会学—商業高校におけるアクションリサーチ (共編著，勁草書房)

子どもの発達危機の理解と支援—漂流する子ども (共編著，金子書房)

保幼小連携の原理と実践—移行期の子どもへの支援 (共著，ミネルヴァ書房)

よくわかる教育社会学 (共編著，ミネルヴァ書房)

新版 教育の社会学 (共著，有斐閣)

新訂 学校臨床社会学 (共編著，日本放送出版協会)

教師の現在・教職の未来—あすの教師像を模索する (共著，教育出版)

Challenges to Japanese Education: Economics, Reform, and Human Rights (共著，Teachers College Press)

Learning to Teach in Two Cultures: Japan and the United States (共著，Garland Publishing Inc.)